

## 三韓王朝における王の崩年モデル

小沢 一雅

大阪電気通信大学

『三国史記』は古代の三韓王朝、すなわち高句麗・新羅・百済のそれぞれの興亡にかかわるさまざまな事跡を編年体で伝えている。年代の基準は三韓の王の崩年（あるいは即位年）であるが、わが国の記紀にみられるように各王朝初期の王の崩年は実際よりかなり古く位置づけられている可能性がある。本稿は、『史記』においてこうした装古操作が行われているという仮定のもとで、実際の王の崩年を推定するための数理モデル（崩年モデル）を考察する。さらに、崩年モデルによって導かれる王の推定崩年と『史記』に記載されている崩年（史記崩年）との比較を行う。

## Mathematical Modelling of Years of Kings' Deaths of the Three Korean Kingdoms

Kazumasa Ozawa (Osaka Electro-Communication Univ)

We have the famous ancient book of Korea, which presents ancient histories of the three Korean kingdoms; namely Goguryeo, Silla and Baekje. In this book, many historical events contemporary with a king are recorded in temporal order. A problem is that dates of ancient kings have probably been feigned to be older than real ones; accordingly a number of historical events have wrongly been dated. This paper presents a mathematical model to estimate reasonable dates of ancient kings of each kingdom: Since the year of a king's death (YKD) is a base time to determine his date, our mathematical model has statistically been established by analyzing a sequence of YKDs of successive kings of each kingdom. Discussion has also been presented.

### 1. はじめに

『三国史記』（以下、史記）が語る三韓王朝並立の時代は、わが国の古代でいえば、およそ弥生時代から奈良時代にかけての期間に対応している。史記は、高麗王朝（918-1392年）の高位貴族であった金富軾の編纂になるもので、三韓王朝並立の時代より500年近くも遅れて書かれた史書である（1145年完成）[1]。同時代の文献でなければ史料的価値が低いという偏った見解もあるが、客観的にはそれは真理とはいえず、まったく同時代の文献でも内容が信頼できない事例はいくらでもある。文献の史料的価値はそれじしんの内容によって決まるものであって、書かれた時刻によって決まるものではない。史記は、大部分において十分信頼に足る内容を伝えている

史料的価値の高い文献と考えるべきである。

史記は、わが国の古代、とくに弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての不透明な時期を解明する上で重要な情報源となり得る潜在的な可能性をもっている。問題は、三韓王朝の初期王（初代～十数代）の崩年が異常に古く記述されていることに起因してか、4世紀後半以前の内容についてはとりわけ信頼度が低いとされてきた。まさに、年代の狂いというものが、そこに書かれている内容に直感的な疑いを抱かせる決定的な動機になっている。この傾向は、わが国の『記紀』についても同様である。

筆者は前報[2]において、わが国の古代天皇の崩年を修正する目的で崩年モデルを構成し、具体的に古代天皇の推定崩年を導いた。この結果、崇神天皇の崩年を早くとも4世紀中頃とみななければならないことも判明した[2,3]。崇神天皇の崩年がこのように4世紀中頃以降に下るとすれば、日本書紀・崇神紀を根拠として女性墓と考えられてきた箸墓古墳の築造年代も4世紀前半～中頃とみなしなければならない。そうなれば、3世紀中頃とみられる卑弥呼の没年とはおよそ100年の開きがあることになり、箸墓古墳はとうてい卑弥呼の墓ではありえないことになる。このように、一定の合理性をもつ方法を用いて事跡の年代を修正することができれば、文献から導かれる日本古代もまったくちがった形に結像することになる。

本稿では、三韓王朝それぞれの初期王の崩年に装古現象がみられる点に注目し、崩年が信頼できる時点以降の王の崩年系列から得られる崩年モデルを外挿的に初期王に適用して崩年の修正を試みる。修正された崩年（推定崩年）と史記原文に記載されている崩年（史記崩年）との比較を行い、いくつかの新知見を導く。

## 2. 三韓王朝における王の崩年推定式

### 2. 1 崩年モデル

王朝を形成した歴代の王（天皇を含む）の崩年を数値系列とみたとき、その変化の傾向を数理的に説明しようという構想のもとに前報[2]で崩年モデルを導入した。実際に、天皇の崩年系列に適用して高い適合率が得られることも実証した。崩年モデルは前報で詳細に述べたが、数式でつぎのように表すことができる。

$$D(n) = A e^{\beta n} + B \quad (\text{崩年モデル})$$

ただし、 $D(n)$ は $n$ 代目の王の崩年（西暦年）。 $\beta$ 、 $A$ および $B$ はそれぞれの王朝によって決まる係数（パラメータ）である。これらを確定できれば、 $n$ 代目の王の推定崩年 $D(n)$ が算定できることになる。パラメータが確定した式を崩年推定式とよぶ。

崩年推定式を得るための手順をまとめるとつぎのようになる。

- ① 文献が記載する王の崩年（西暦年）を初代から順次系列としてならべる（崩年データ系列の作成）。
- ② 王朝の初期段階に現れる装古現象（王朝の開始を古く装うため、初期の王たちの寿命を長く引き延ばす現象）を検出し、その区間内の崩年データを除外する。もし、そのほかに除外すべき理由のある崩年データがあれば、それらも除外する。こうして得られる信頼度の

高い崩年データのみからなる分析用データ系列をつくる。

- ③ 分析用データ系列にもっとも適合する崩年モデルのパラメータを探索して決定し、崩年推定式を確定する。

以下の節では、この手順にしたがって三韓王朝の各王朝における崩年推定式を求めていく。三韓王朝の王の崩年データはすべて『史記』百濟本紀、新羅本紀、および高句麗本紀から抽出した[1]。

## 2. 2 百濟王の崩年推定式

まず、図1に百濟王の崩年データを示す。

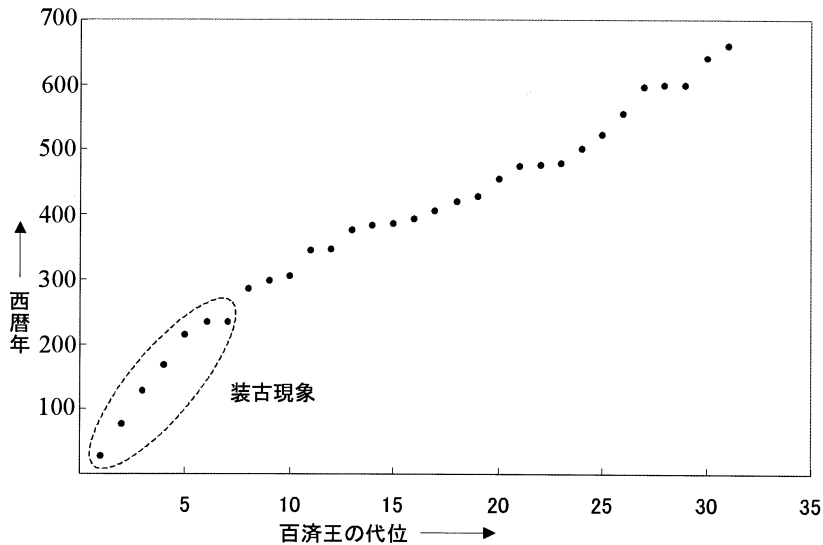


図1 百濟王の崩年データ

始祖温祚王からはじまる百濟王朝は、31代義慈王で幕を閉じる。この間、高句麗、新羅あるいは倭国などとの間で交戦や友好的交流が織りなす長い歴史を歩んできたわけだが、最後は新羅によって滅亡に追い込まれる(660年)。図1にグラフ化された百濟王の崩年データをながめると、まず気がつくのは王朝初期の王たちの崩年データがそれ以降と比べて明らかにちがった傾向をしめしていることである。王朝創成期の王たちを古く位置づけようとする“装古”現象とみてよいだろう。前報[2]で述べた天皇の日本書紀崩年をもまったく似たようなカーブを描く。日本書紀ほど過激ではないが、百濟第2代多婁王の在位年数は49年、3代己婁王は51年、4代蓋婁王は38年、5代肖古王は48年とあるように後代にくらべると格段に長い。

天皇の崩年データの分析では、日本書紀崩年の初期部分は信頼度が低いとみてすべて除外した。百濟王の場合も“装古”部分を除外するとすれば、何代目までを除外するかが問題である。ここでは、図1にみられる崩年データの変化傾向から7代沙伴王までを装古部分として除外することにした。8代以降の崩年データに崩年モデルをあてはめた結果、つぎの崩年推定式が得られた。適合率は0.987である(データの数が少ないので適合率は若干低めになっている)。

$$D(n) = 423 e^{0.0231 n} - 217 \quad (\text{百濟王崩年推定式})$$

百濟王崩年推定式によって描かれる曲線を図 2 にしめす。崩年データとの乖離もすくなく、きわめてうまく適合していることがわかる。王朝初期 7 代の崩年データの不自然さもよくわかる。

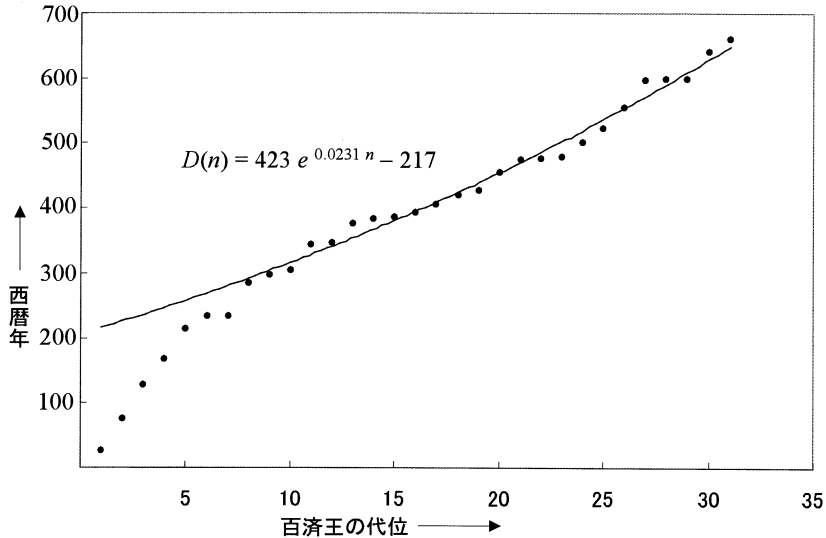


図 2 百濟王の崩年推定式 (曲線)

### 2. 3 新羅王の崩年推定式

新羅王朝は特異である。崩年データの系列をグラフで見ると、次第に上昇が抑制される傾向をしめしている。崩年モデルという減退環境 ( $\beta < 0$ ) に相当するとみられる[2]。王朝初期段階の傾向も後半と似てはいるが、これは異質であって王朝初期に共通する装古現象とみなすべきであろう。三韓を統一し、最後の王である 56 代敬順王まで続いた新羅王朝が、初期段階 (装古部分) を除いて、一貫して減退環境におかれていたことは図 3 にしめた崩年データの傾向からはつきり読みとれる。三韓史にくわしいわけではないので、わたしにはその理由を詳細に云々する実力はない。一つの推測として、新羅王朝をとりまく環境がつねに流動的で不安定だったのではないかという点をあげることができるであろう。

王朝の創成期からしばらくは弱小な存在であり、勃興してきた強大な百済との交戦にあけくれる中で、倭や高句麗の“くびき”から逃れることもままならない状況にあったと推測される。画期は、29 代武烈王～30 代文武王の頃におとずれた。唐の册封を受け、強大な唐の軍事支援を背景に百済と高句麗を滅亡に追い込み、三韓の統一に成功したのである。しかし、統一新羅が成立した直後から、唐は朝鮮半島の完全支配をめざして新羅に執拗に内政干渉を行ったため、その後も新羅は唐との間で“綱わたり”のような生き残り外交を続けなければならなかった。こうした新羅王朝をとりまく間断のない緊張状態が、崩年データのしめす減退環境の一因になったのではなかろうか。

さて、新羅王朝の崩年データにおいて、何代目までを装古部分とみるかであるが、新羅 15 代目の基臨尼師今王までと判定した。王朝をとりまく環境の変化を考えるにあたって、19 代訥祗

麻立干を変曲点とし（図3の点線参照）、これ以前を増進環境、これ以後を減退環境として二つの崩年モデルを用いることにした。

このような方針の下で崩年データを分析し、つぎのように崩年推定式を決定した。

$$\left. \begin{aligned} D_1(n) &= 79 e^{0.0788 n} + 92 & (1 \leq n \leq 19) \\ D_2(n) &= -1443 e^{-0.048 n} + 1025 & (19 \leq n \leq 56) \end{aligned} \right\} \text{ (新羅王崩年推定式)}$$

新羅初代赫居世～19代訥祗麻立干までは、 $D_1(n)$ を用い、19代以後は $D_2(n)$ を用いることになる（ $D_2(n)$ の適合率は0.994である）。訥祗麻立干についてはいずれを用いてもおなじ推定崩年の値をしめす。図3には、新羅王崩年推定式によって描かれる曲線をしめしている。図3の曲線は一本の曲線のように見えるが、19代訥祗麻立干の左右で異なる曲線が描かれている。二本の曲線が19代訥祗麻立干のデータ点でなめらかに接続する条件を加えて $D_1(n)$ を決定している。 $D_1(n)$ の決定条件のもう一つとして、百濟肖古王の推定崩年258年（後述）を基準点とみたとき、新羅9代伐休尼師今の崩年が253年頃と推定できることも組み入れている。推定の根拠はつぎのとおりである。

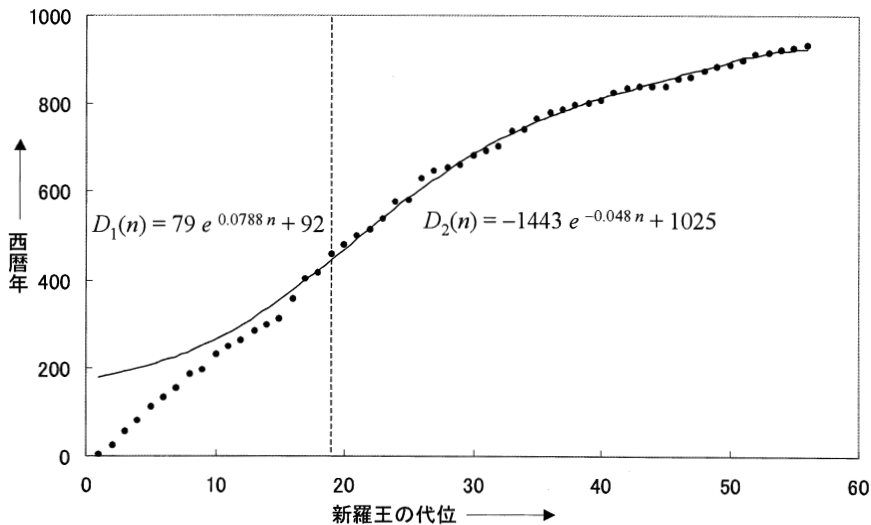


図3 新羅王の崩年推定式（曲線）

百濟本紀が肖古王の在位中の事跡として、新羅母山城を攻めたこと、伐休尼師今が派遣した將軍仇道の軍を破ったこと、10代奈解尼師今が利音を將軍として百濟沙峴城を攻撃したことなどを記載している。新羅本紀にもこれを裏づける記載がある。さらには、肖古王在位中に伐休尼師今が没し、奈解尼師今があとを継いだことも見逃せない。これらを総合して伐休尼師今の崩年を253年頃と推定したわけである。

## 2. 4 高句麗王の崩年推定式

高句麗王朝は、大陸の東北部にいた扶余を出自とする王朝といわれている。漢族との抗争の中で次第に拠点を南下させ、唐と新羅の連合軍によって滅亡させられる頃（668年）には平壤を

拠点としていた。始祖東明聖王から28代宝臧王にいたる28代続いた王朝である。

王朝の前半では朝鮮半島におけるその勢力はとくに強大なものではなかったが、後半の19代広開土王の頃には三韓の中でもとりわけ大きな力をもつにいたった。息子の20代長寿王が建立した広開土王の業績をたたえる『広開土王碑文』（現在の大陸側吉林省に遺存する石碑）は、同一場所かつ同時代の記録として、日本の古代を考える上でも信頼度の高い貴重な情報を伝えるものである。余談であるが、長寿王の在位年数は78年におよんでいる。諡号「長寿王」は、まさに三韓でも珍しい長寿ぶりを表現したものだらう。

高句麗王朝の崩年データについても、王朝初期段階で装古現象がみられる。装古部分を除外して分析した結果、つぎの高句麗王崩年推定式が得られた。適合率は0.994である（データ数が多くないわりに高い適合率である）。

$$D(n) = 954 e^{0.0186n} - 924 \quad (\text{高句麗王崩年推定式})$$

図4には、高句麗王朝の崩年データ全体と崩年推定式が描く曲線を重ねて図化している。この図で、王朝初期において曲線から乖離している五つの崩年データが装古部分である。高句麗王朝においては一貫した増進環境が保たれていたことは、崩年データの傾向として図からはっきり読みとれる。

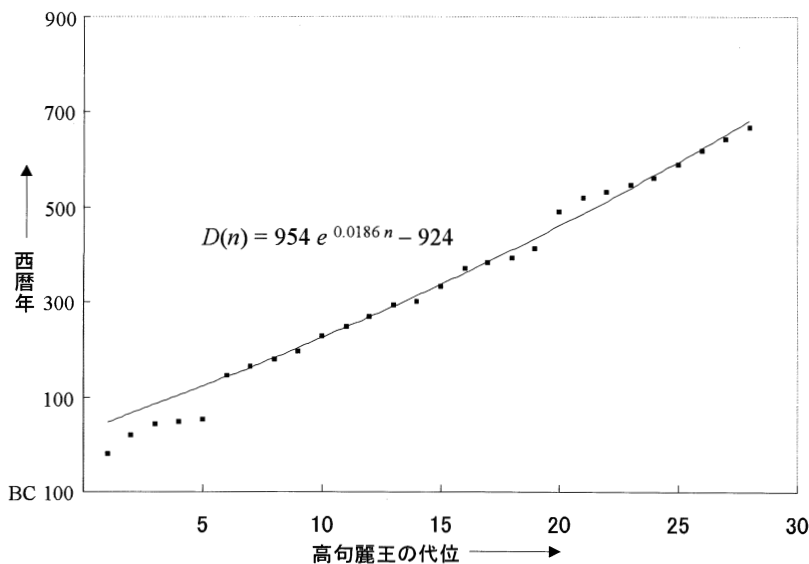


図4 高句麗王の崩年推定式（曲線）

### 3. 三韓の王の崩年表

前節までに得られた崩年推定式を用いて三韓の王の推定崩年を具体的に算出し、その結果を加えた崩年表を表1に掲げている。ただし、新羅王については30代までとし、31代以降は省略している。この表の崩年欄に記載している基本数値はすべて史記崩年である。さきに述べたように、各王朝初期の崩年（装古部分）は信頼できない。そこでこれに該当する王たちについては、崩年推定式によって得られる推定崩年を〈 〉で囲んで併記している。



表1 三韓王朝の崩年表 (<> 内の数値は推定崩年)

| 百済    |    |           | 新羅     |    |           | 高句麗      |    |           |
|-------|----|-----------|--------|----|-----------|----------|----|-----------|
| 王名    | 代  | 崩年        | 王名     | 代  | 崩年        | 王名       | 代  | 崩年        |
| 始祖温祚王 | 1  | <216> 28  | 始祖赫居世  | 1  | <177> 4   | 始祖東明聖王   | 1  | <48> BC19 |
| 多婁王   | 2  | <226> 77  | 南解次次雄  | 2  | <184> 24  | 瑠璃明王     | 2  | <66> 18   |
| 己婁王   | 3  | <236> 128 | 儒理尼師今  | 3  | <192> 57  | 大武神王     | 3  | <85> 44   |
| 蓋婁王   | 4  | <247> 166 | 脱解尼師今  | 4  | <200> 80  | 閔中王      | 4  | <104> 48  |
| 肖古王   | 5  | <258> 214 | 婆娑尼師今  | 5  | <209> 112 | 慕本王      | 5  | <123> 53  |
| 仇首王   | 6  | <269> 234 | 祗摩尼師今  | 6  | <219> 134 | 太祖大王     | 6  | 146       |
| 沙伴王   | 7  | <280> 234 | 逸聖尼師今  | 7  | <229> 154 | 次大王      | 7  | 165       |
| 古尔王   | 8  | 286       | 阿達羅尼師今 | 8  | <240> 184 | 新大王      | 8  | 179       |
| 責稽王   | 9  | 298       | 伐休尼師今  | 9  | <253> 196 | 故国川王     | 9  | 197       |
| 汾西王   | 10 | 304       | 奈解尼師今  | 10 | <266> 230 | 山上王      | 10 | 227       |
| 比流王   | 11 | 344       | 助真尼師今  | 11 | <280> 247 | 東川王      | 11 | 248       |
| 契王    | 12 | 346       | 沾解尼師今  | 12 | <295> 261 | 中川王      | 12 | 270       |
| 近肖古王  | 13 | 375       | 味鄒尼師今  | 13 | <312> 284 | 西川王      | 13 | 292       |
| 久仇首王  | 14 | 384       | 儒礼尼師今  | 14 | <330> 298 | 烽上王      | 14 | 300       |
| 枕流王   | 15 | 385       | 基臨尼師今  | 15 | <350> 310 | 美川王      | 15 | 331       |
| 辰斯王   | 16 | 392       | 訖解尼師今  | 16 | <371> 356 | 故国原王     | 16 | 371       |
| 阿莘王   | 17 | 405       | 奈勿尼師今  | 17 | 402       | 小獸林王     | 17 | 384       |
| 腆支王   | 18 | 420       | 実聖尼師今  | 18 | 417       | 故国壤王     | 18 | 392       |
| 久尔辛王  | 19 | 427       | 訥祗麻立干  | 19 | 458       | 広開土王     | 19 | 413       |
| 毘有王   | 20 | 455       | 慈悲麻立干  | 20 | 479       | 長寿王      | 20 | 491       |
| 蓋鹵王   | 21 | 475       | 炤知麻立干  | 21 | 500       | 文咨明王     | 21 | 519       |
| 文周王   | 22 | 477       | 智證麻立干  | 22 | 514       | 安臧王      | 22 | 531       |
| 三斤王   | 23 | 479       | 法興王    | 23 | 540       | 安原王      | 23 | 545       |
| 東城王   | 24 | 501       | 真興王    | 24 | 576       | 陽原王      | 24 | 559       |
| 武寧王   | 25 | 523       | 真智王    | 25 | 579       | 平原王      | 25 | 590       |
| 聖王    | 26 | 554       | 真平王    | 26 | 630       | 嬰陽王      | 26 | 618       |
| 威德王   | 27 | 598       | 善德王    | 27 | 647       | 荣留王(建武王) | 27 | 642       |
| 惠王    | 28 | 599       | 真德王    | 28 | 654       | 宝臧王      | 28 | 668       |
| 法王    | 29 | 600       | 太宗武烈王  | 29 | 661       |          |    |           |
| 武王    | 30 | 641       | 文武王    | 30 | 681       |          |    |           |
| 義慈王   | 31 | 660       |        |    |           |          |    |           |

表1を大観しつつ、史記が伝える三韓の王朝系譜をすべて史実とした場合(すべての王が実在したとした場合)、つぎのような知見が得られる。

崩年データと崩年推定式のしめす値との一致の度合い(グラフでは崩年データ点と曲線の一致の度合い)がデータの信頼度のめやすと考えると、

- (1) 百済王の崩年データは、3世紀末以後に関しては信頼できそうだが、それ以前については修正の必要がある。新羅王については4世紀末以前、高句麗王については、2世紀中頃以前についてはやはり修正の必要がある。
- (2) 崩年モデルによる分析結果からすれば、王朝の開始時期は、高句麗がもっとも古く1世紀中頃、新羅は2世紀末頃、百済は3世紀初頭頃とみられる。

という二点が注目される。

新羅本紀がしめす崩年データをグラフ化(図3)してみると、ほかの王朝にくらべて装古部分の多さがとくに目立った。この原因は、史記の編者であり高麗王朝の高位貴族でもあった金富軾が、編集過程においてみずからの出自である新羅王朝をできるかぎり古く位置づけようとした結果だという見方があるようである[1]。そうかも知れない。

#### 4. むすび

日本古代を考える上で史料として有力なものをあげれば、記紀、三国史記、広開土王碑文および魏志倭人伝をはじめとする大陸文献がある。それぞれに類似もしくは関連する記録があったとしても、年代が合致しなければ情報の価値は減少してしまう。とくに記紀や三国史記については、王朝初期において装古現象がいちじるしく、年代に関するかぎり、信頼性はほとんどないといってもよい。これがまず直感からして史料的価値を低くみるという動機を生んでいる。

年代は古代を読み解く上でもっとも重要な情報であるが、もっとも記憶に残りにくい情報でもある。だれが何をしたか、どの王のときに何があったか、など特定の人物と関連づけられた事跡は記憶に残りやすい反面、それがいつ（何年）の出来事なのかという「数値」情報は記憶に残りにくい。われわれの個人史を振り返ってみても同じような傾向を実感する。断片的にせよ出来事を文書的に記録するという行為が現れる時期以前の古い歴史を史書中に復元的に記述していく場面で、編者たちはこういった年代情報の欠損に直面して苦闘したにちがいない。記紀や三国史記が伝える王朝初期の記述はこうした苦闘の結果とみてよいだろう。さきに触れた金富軾による新羅史の装古操作の話が本当だとすれば、彼は年代情報の欠損状況をむしろ逆に利用したといえるのかも知れない。

正確な年代情報がおそらく欠損する中で編纂されたと推測される記紀や三国史記における王朝初期の記事の年代を的確に適正化できれば、状況は劇的に改善されるだろう。年代が適正化できれば、それを軸にちがった史料にある多くの記事を対比させ、ときには関連づけることもできるからである。

本稿は、文献に記載されている年代の再検討を軸として日本古代の実像を解明しようとする筆者の研究の一部である。前報[2]における天皇の推定崩年および本稿における三韓王の推定崩年によって、それぞれの王朝初期の記事の年代がほぼ適正化できると考えている。すなわち、記紀と三国史記の記事を対比させることによって、3世紀中頃～4世紀中頃における日本古代の新たな実像を描くことができる可能性が生まれたと考えている。とくに、倭国もしくは倭人に関する記事が豊富な新羅本紀の年代が表1にある推定崩年によって修正されれば、新羅本紀がこの時期における日本古代の謎を解く重要な鍵になるという期待感をもっている。

#### 【参考文献】

- [1]金富軾（井上秀雄訳注）、『三国史記1』および『三国史記2』、平凡社、1980.
- [2]小沢一雅、「天皇崩年の数理モデル」、情報処理学会研究報告 2007-CH-75, pp.23-30, 2007.
- [3]小沢一雅、「崇神天皇の崩年はいつ頃か—崩年モデルによる数理的検討—」、第13回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」論文集, pp.113-120, 2007.